

# 群馬県に於けるナイフ形石器の覚書

麻 生 敏 隆

## は じ め に

筆者は昭和57年に利根郡月夜野町大字師に所在する後田遺跡を調査する機会を得た。この遺跡はナイフ形石器と石刃を主体とした石器文化をもち、時期的には AT 降下以前とみられる。

この年は関越自動車道関係に限ってみても、10カ所近くの旧石器時代遺跡の調査が実施され、從来赤城山南麓に限られていたものが、赤城山西麓など県内各地で確認されてきた。これらの遺跡から出土した資料は現地説明会や埋文センターなどで公開展示され、多くの方々に見ていただけた。<sup>(1)</sup> 今後、すべての遺跡についての資料の整理がおこなわれると思うが、多少でも参考になればと考え、県内のナイフ形石器についてまとめてみたい。

### 主なナイフ形石器出土遺跡とその特徴

県内におけるナイフ形石器の出土例はその大部分が表面採集によるものであり、調査で出土したものについても詳細な報告がなされたのは数少ない。そのため、ここでは出土層位がはっきりしている遺跡について述べてみたい。

#### (1) 岩宿遺跡

本遺跡は相沢忠洋氏が発見し、昭和24年に明治大学考古学研究室によって発掘調査され、日本における旧石器時代文化の存在が初めて確認された記念すべき遺跡である。

場所は新田郡笠懸村大字阿佐美字沢田にある二つの小丘の鞍部西側斜面に位置し、岩宿 I・II という二つの石器文化が検出されている。報告によれば、岩宿IIからナイフ形石器が出土しているが、岩宿 I にはみられないとされている。だが、ブレイドフレイクとされているものの中に細かい剝離痕のみられるものが数点ある。これらについてもナイフ形石器の範疇として考えてもいいのではないだろうか。なぜならば、ナイフ形石器と石刃との違いは細部調整、すなわちプランディングの有無でしかないからだ。

岩宿 I は黒色帶中にみられ、13点の剝片が出土しているが、そのうちの 5 点には打面に近い部分や先端部に細かい剝離痕が認められる。これらは南関東のIX・X層にみられる始源的なナイフ形石器のプランディングのあり方と同様な特徴であり、さらに、石器組成にハンドアックスをもつことからも、武藏野編年の第 I b 亜文化に相当するといえる。

岩宿IIは BP 層と黒色帶の間に包含されている。ナイフ形石器 3 点、切出形石器 3 点、ほかに搔器・削器を石器組成にもつ。ただし、ナイフ形石器としたものに、分厚な横長剝片を尖頭状に加工した石器である角錐状石器に近いものがある。この種は南関東の V・IV 層下部に特徴的にみ

られる石器であり、組成から考えてみても、武蔵野編年の第II a 亜文化期に相当する。

(4)(5)  
(2) 武井遺跡

遺跡は勢多郡新里村武井内出東に位置する。昭和29年に明治大学考古学研究室によって発掘され、詳細な報告がなされている。それによれば、武井 I・II という二つの異なる石器文化が層位的に検出されているが、共にナイフ形石器をその石器組成にもっている。

武井 I ではナイフ形石器 2 点、切出形石器 2 点が出土している。ナイフ形石器は 2 点とも縦長剝片を素材に打面を残したまま基部とし、その両側にプランティングを加えている。これは岩宿 I と同様に始源的なナイフ形石器の特徴と同じであり、出土層位が黒色帯であることからも古い段階のものであるといえよう。切出形石器は縦長剝片、横長剝片を素材とし、両側縁に細部調整を加え台形状に整えている。武蔵野編年の第 I b 亜文化期に相当する。

武井 II は上部ローム層の軟質部から出土しているが、YP との関係ははつきりしていない。石器は片面及び両面調整の尖頭器を主体とし、ナイフ形石器も 40 点を数える。他に搔器、削器も多数出土している。ナイフ形石器はその大部分が縦長剝片を素材としているが、一部に横長剝片もある。基部の両側にプランティングを加えており、両側縁にもプランティングが一部分を残して加えてある。この残った部分が刃部に相当するが、この種のナイフ形石器は南関東の IV 層上部に数多くみられる茂呂型ナイフ形石器であり、時期的にはナイフ形石器文化の終末期、いわゆる砂川期に位置づけられ、武蔵野編年の第 II b 亜文化期に相当する。同様の石器組成をもつ石器文化

(6) が邑楽郡大泉町に所在する御正作遺跡から出土しているが、詳細な報告は未刊である。

(7)  
(3) 和田遺跡

遺跡は新田郡笠懸村大字西鹿田字和田に所在する。旧石器時代の文化層が三枚あるものの、量的には VII・VIII 層と呼ばれる黒色帯から検出されているもの以外は貧弱である。そのために、すべてにナイフ形石器がみられるものの、石器組成はほとんど不明であるといえよう。

V 層は上部と下部に分けられるが、ナイフ形石器は下部にみられる。打面と先端部の一部を共に欠いているものの、打面を基部とし、その両側にプランティングを加えることにより切出形をつくりだしている。素材は縦長剝片である。出土層位は BP 層直上である。

VII 層のナイフ形石器は縦長剝片を素材とし、二側縁にプランティングを加えたものであるが、これも先端部と基部を共に欠いている。出土層位は BP 層と黒色帯の間層である。

VIII 層からは 7 点のナイフ形石器が出土している。報告によると、その特徴から四つに細分されるとのことである。第 1 のグループは、大形の剝片を折断することにより素材を得るもので、折断面をそのまま残し、それに相い対する一側縁にプランティングを加えることにより切出状を作りだしている。第 2 のグループは、素材に横長剝片を用いて、基部を中心とした二側縁にプランティングを加えることにより切出状を作りだしている。第 3 のグループは、尖頭状を呈する小型のナイフ形石器である。基部を中心にプランティングが両側縁に加えられているが、先端部は前の段階の調整による刃部を残している。形状は左右対称形に整っている。第 4 のグループは、横

長剝片を素材とし、打面部分にわずかなプランティングを加えるだけで、剝片の形状をそのまま利用しており、形態的に一つのグループとするのには無理があるといえる。

VIII層の石器文化の特徴としてあげられるものに、剝片剝離技術としての折断技術がある。これは第1グループのナイフ形石器にみられるような、石器製作に用いる素材となる小形の目的的剝片を得るために、大形の剝片を小さくいくつに折断し分割する技術である。この種の技術は、<sup>(8)</sup> 栃木県の向山遺跡III層にみられ、層位も黒色帯に対比できるが、石刃技法をもつということで、和田遺跡とは若干の違いがみられる。他にもいくつかの遺跡において存在するようであるが、明確に論ずるには資料不足としかいえない。今後の資料の増加を待ちたい。

いずれにしても、和田遺跡はVIII層のみならず、すべての文化層において資料不足といえよう。

以上、3遺跡について記述してきたが、やはり資料不足である点は認めざるを得ない。さらに石器組成すべてが明らかにされているのかも疑問であるが、現状ではいたしかたないであろう。

#### ナイフ形石器出土層位と編年

群馬県においては、関東ローム層中に数多くの軽石層が認められる。これらの多くは噴出源火山とその年代についての研究がかなり進んでいる。これらの軽石層を鍵層としてみることができるならば、考古学上の編年を組むうえで大きな助けとなるであろう。

個別の遺跡の石器文化について考えてみるならば、岩宿Iは黒色帯中にみられ、石器組成からみても第I期に大別できる。同様に武井Iについても第I期と考えてよいであろう。だが、黒色帯中から検出されているものの、不明な部分が多い和田遺跡VIII層についてはAT降下以前であることははっきりしているが、編年上では未定とせざるを得ない。第I期は第I文化期に相当する。

次に、黒色帯上面からBP層にかけて位置するものを第II期とするならば、岩宿IIと和田遺跡VII層がこれにあたる。この期は武蔵野編年の第IIa亜文化期に相当する。

さらに、BP層上面からYP層にかけてを第III期とみるならば、和田遺跡V層が考えられる。武蔵野編年の第IIb亜文化期に相当する。ここで問題になるのは武井IIの位置である。前にも述べたように、武井IIとYP層との関係ははっきりしていない。だが、武井IIと同様の石器組成をもつ御正作遺跡はBP層の上からYP層にかけて、その包含層をもっている。そこで、武井IIと御正作遺跡がほぼ同時期と仮定するならば、武井IIは第II期にあたるといえよう。

最後に、YP層上面から黒色土にかけてであるが、現在のところはこの時期に位置するナイフ形石器をもつ石器文化は未確認である。

以上、述べてきたことから考えてみると、前後関係は次のようになる。

岩宿I	岩宿II	武井II
武井I	和田VII	和田V

今後、資料の増加によりさらに細分されるかもしれないが、現状ではこれで充分であろう。

## お わ り に

これまでまとめてきて思うことは、資料不足と編年を組むうえでの資料の貧弱さである。特に、軽石を中心とした地質学に大きく依存しなくてはならないことと、考古学的にも旧石器文化研究の発祥の地でありながら、南関東を中心とした武蔵野編年と対比しなくては大筋を組むことができない点である。今後は南関東のみならず、他地域との対比をおこなう一方、群馬県内の研究の主体性を作りあげていくことが我々の責務であると思う。

さらに、最近の大規模な開発に伴う発掘調査は、面積の広大さもさることながら、複数の文化層をもつ点で、これまでの群馬県の歴史を大きく書き変えるものとなっている。特に、赤城山西南麓を中心とした旧石器時代文化の遺跡の増加には驚くべきものがあり、今後詳細な報告がなされていくに従って、北関東地域のみならず、日本の旧石器文化を知るうえで重要な位置を占めていくであろう。

### 註

- (1) 「後田遺跡現場見学会資料パンフレット」1982 などの現地説明会資料を参照されたい。
- (2) 杉原莊介 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第一冊 1956
- (3) 鎌田俊昭 『関東・東北地方における先土器時代石器文化の地域性と共通性(2)』『物質文化』26号 1976
- (4) 杉原莊介 『群馬県武井における二つの石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第七冊 1977
- (5) 松村明子 「書評 杉原莊介著『群馬県武井における二つの石器文化』」『駿台史学』第45号 1978
- (6) 大泉町教育委員会 『御正作遺跡発掘調査概報』1981
- (7) 若月省吾 『笠懸村誌』別巻一 1983
- (8) 芹沢長介 『向山 栃木県栃木市平井町向山旧石器時代遺跡出土資料』東北大学文学部考古学研究室考古学資料集 第3冊 1980



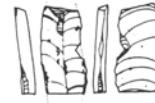
岩宿 I 石器文化



岩宿 II 石器文化



和田 V 層

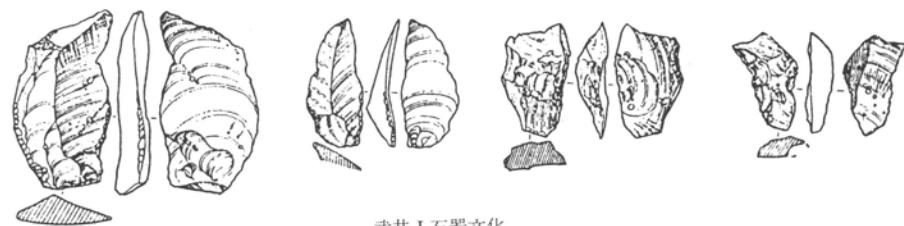


和田 VII 層



和田 VIII 層

(縮尺 = 1/2)



### 武井 I 石器文化



武井II石器文化

(縮尺 =  $\frac{1}{2}$ )